

自己評価報告書(最終報告)

報告者

人間形成コース／皆川 直凡

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

報告者は、季節の風物と人との交感を17音という制約のもとに表現しようとする俳句には詠み(創作)と読み(鑑賞)という二つの楽しみ方があることに注目して心理学的分析を積み重ね、詠みと読みの経験の蓄積が双方の熟達化をもたらすことを明らかにしてきたが、報告者が研究対象としてきた俳句は、同人誌への投稿者や学生・生徒の俳句に限られていた。しかしながら、俳句は年齢や立場を超え国境を越えて詠まれ、それぞれの詠み手の生の証となり、心の癒しともなっている。昨年、わが国を襲った未曾有の大震災を詠んだ俳句も、その一つであろう。そのため、情報科学など他領域の研究者と連携して多様な俳句を収集し、量的および定性的分析を行う。俳句という日本発信の文化に対する学際的アプローチをとおり、日本人の心性にせまりたい。

2. 点検・評価

年度目標のとおり、これまで研究対象として扱ってこなかった俳句(たとえば、新聞投句)にも研究対象を広げて作者と選者の心情分析を行い、その成果の一部を日本心理学会第76回大会のワークショップにおいて発表した。なお、このワークショップは自らが企画代表者となり、他大学の心理学者や民間企業の研究所の情報科学者と連携して開催したものであり、一貫した主題で7回目を迎えた。現在、これらの分析や共同研究者との協議を順調に継続し、今年度末に開かれた学会でも発表し、学術雑誌にも投稿した。さらにもう1本の学術論文も完成に近づき、来年度の学会でのワークショップの開催に向けて準備している。なお、上述の共同研究者との協議には、今年度の研究成果とこれまでの研究成果を合わせた業績を基盤として来年度に科研費を申請することに向けた協議が含まれている。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

所属コースの入試合格者は、平成19年度からの5年間、24名、23名、20名、27名、32名と推移し、順調であったが、24年度は激減した。まず、この原因を究明し、適切な対策をとることが重要と考え、実行しているが、現時点では原因を特定できていない。今後は、その原因究明の努力をつづけるとともに、入試広報活動に努めたい。具体的には、まず自らの研究・教育内容を全国に発信すべく個人研究室のウェブページを充実を図る。また、所属コースへの入学・修了実績のある大学を選び、関連分野の教員に親書を添えて、大学院ガイドブック等を送付する。送付先から要請があれば、出向いて入試説明会を開く。しかし、なによりも大切なのは、自らの研究・教育活動を質・量ともいっそう充実させることであるとする。

2. 点検・評価

年度目標に記載した方法をほぼ実行して入試広報活動や自己の研究・教育活動の充実に向けた結果、平成25年度大学院入学試験では前期入試において第1・2志望合わせて22名が所属コースを受験し、定員を充足する15名が合格した。また、中期入試においても2名、後期入試においても1名がそれぞれ合格した。こうして3回の入試で定員を超える合格者が出たが、入学辞退者がでて、実際の入学者は定員を下回った。このことについては、直ちに対策を立てている。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

授業担当者としては、学生が主体的に授業に取り組めるよう、班学習、討論等を取り入れる。複数の教員で担当している科目において講義内容の関連づけができるよう図ってきた連携をさらに強める。研究指導教員としては、学生の関心と能力の把握に努め、彼らが質の高い課題研究を行うことができるよう、計画的に指導・支援していく。教員採用試験や臨床発達心理士等の資格取得についても積極的に支援する。必要に応じて個別面談や補習も行う。ゼミでの協同的活動を随時企画し、互いに支え合う中で生活が健全なものになるよう支援する。

2. 点検・評価

授業、研究指導ともに、年度目標のとおり、実行している。研究指導の成果として、昨年度大学院修了生1名と学部卒業の学生1名が今年度の教員採用試験に合格した。また、大学院生3名が本年3月に修士課程を修了し、うち1名は高等学校教諭として現場復帰し、2名(長期履修学生)は教員試験の1次試験に合格したことやボランティアとしての貢献(ともに、申請者のサポートによる)が認められたことから、志望先の県の学校に講師として採用された(1名は他県では2次試験にも合格していたが、第1志望ではなかったため辞退し、第1志望の県で講師をすることになった)。昨年度修士課程修了の研究指導学生1名が本年4月、本学予防教育科学研究センターに研究補佐員として採用され、9月には臨床発達心理士資格認定申請書類を滞りなく提出するとともに、来年度も研究補佐員として採用されることになった。授業に関しては、四国遍路という地域文化について体験的に理解させることを通して人間力の育成を図るという本学の特徴的科目を複数コースの教員との協同体制のもとで担当し、体験的理解を深め他者と共有する手段として俳句の創作を指導した。

II-2. 研究

1. 目標・計画

日本の伝統文化(俳句、絵本、四国遍路など)に対する認識の深化と発達の過程に関する研究を中心に据え、人間の五感に基づく認知機能とそれを基盤とするコミュニケーション機能(感情の認知・表出・制御を含む)について、実証的方法を用いて探究する。その成果を基盤として「知性と感性を結び、発達を導く教育」を構想し、実践する。前年度の研究成果を基礎系と応用系、それぞれ一つ以上の心理学会において発表する。さらに、2本以上の学術論文の執筆と投稿を行う。

2. 点検・評価

年度目標に記載したとおりの研究を実行するとともに、前年度から今年度にかけての研究成果を日本心理学会第76回大会のワークショップで発表し、日本発達心理学会第24回大会においてポスター発表した。また、1本の学術論文を投稿を完了し、1本はデータ収集を終えて投稿準備中である。これらの研究成果は、自らの担当授業や後記II-4に示す附属学校や社会との連携に活かされている。また、上記とは別に、助言・指導をつづけている修了生2名を第1著者、本報告者を第2著者とする学術論文も投稿し、掲載された。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

任期途中である学校教育学部教務委員会委員、就職委員、および教職実践演習実行委員会委員としての職務をまっとうする。とくに、教職実践演習実行委員会委員長として、教職実践演習の平成25年度開設に向けて授業内容の具体案作成ならびに実施体制の確立に尽力する。必要に応じて、徳島県や鳴門市の教育委員会などとの協議の場にも臨み、授業内容の実質化に努めるとともに、社会との連繫をはかる。さらに、人間形成コース教員としてコース会議に出席するとともに、応分の役割を遂行する。

2. 点検・評価

年度目標に記載したことはすべて実行した。うち、特筆すべきは以下の業績である。学校教育学部教務委員会では副委員長に任命され、責務を果たした。就職委員や学部3年生クラス担当教員としての責務も果たした(就職支援行事、合宿研修など)。また、教職実践演習実行委員会委員長として、教職実践演習の平成25年度開設に向けて授業内容の具体案作成ならびに実施体制の確立に尽力し、9月の実行委員会において最終案を提示し、10月の実行委員会で承認され、11月の実行委員会では演習課題例を提案した。また、教務担当理事や教務課職員とともに徳島県教育委員会および鳴門市教育委員会に出向き、連携・協力についての協議を行った。12月の実行委員会および学部教務委員会では、教職実践演習の受講資格の決定や履修の手引きへの記載が議題となり、その議論に中心的な役割を果たして記載を完了させた。1月から4月にかけては、大学院生用学修キャリアノートの作成に尽力し、学部生ならびに大学院生向けの教職実践演習事前説明会の開催準備に尽力し4月当初に開催した。さらに、年度目標提出後に他コースの教員選考委員に選出され、責務を果たした。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

本学教育支援講師・アドバイザーに登録するとともに、各方面からの要請に応じ、附属学校、公立学校等に出向き(前期・後期各3回を目標とする)、また、教育職に就いた修了生の教育研究活動に対する助言・指導を行うとともに、共同研究を行う(年間6回程度、協議の場を設けることをめざす)。他大学の教員や企業の研究所員との共同研究を継続・発展させ、その成果を社会に還元する。さらに、県立図書館協議会委員としての職務を遂行する。県庁からの委嘱に基づき、心理学の専門家として、定時制の看護学校の講師を務め、働きながら正看護師の資格取得を目指している人たちの指導・支援を行う。

2. 点検・評価

年度目標以上のことを実行した。うち、特筆すべきは以下の業績である。附属小学校の校内研修会における講師を前年度より継続して務め、本年度は10回務めた。また、教育職についた修了生との教育研究活動に対する助言・指導を年間8回(年度目標では6回としていた)行い、学術論文を完成させた。なお、年度目標には掲げていなかったが、その修了生が連合大学院博士課程を受験し、合格した。他大学の教員や企業の研究所員との共同研究も継続・発展している。さらに、年度目標とはしていなかったが、上記とは別の修了生とも研究協議を行い、本年4月より、月1回程度の割合でミーティングを重ね、学術論文を完成させた。また、他コースからの委嘱により留学生対象の授業(日本の教育と文化)を担当し、俳句の創作指導をおこなった。さらに、本学の他コースの修士課程を修了し他大学の専任講師している人物を連合大学院の研究生として事前指導のうえで受け入れた。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

下記の5点は、本学への特記すべき総合的貢献であるといえる。①教職実践演習の授業内容の具体案の作成を完了させ、同科目の受講資格の決定や履修の手引きへの記載にも貢献したこと。②本学ならびに相手先の民間企業の共同研究取扱規程に基づく産学共同研究を発展させし、研究成果を学術誌や学会で公表したこと。③四国遍路という地域文化について体験的に理解させることを通して人間力の育成を図るといふ本学の特徴的科目を複数コースの教員との協働体制のもとで担当し、体験的理解を深め他者と共有する手段として俳句の創作を指導したこと。④附属小学校教諭との教育・研究両面における協力体制を大きく進展させたこと(研究の項に記載した学術論文には、その成果物が含まれている)。⑤本学修士課程修了生の指導に力を入れ、連合大学院博士課程の正規学生としての入学者と研究生としての入学者をそれぞれ輩出したこと。